

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
珊瑚集	14
瑪瑙集	26
紅玉集	29
3月号月評	30
惠贈句集拝見(44)	32
惠贈俳誌拝見(15)	34
特別作品「秋の中歌を訪ねて」	36
琥珀集作品鑑賞	38
珊瑚集作品鑑賞Ⅰ	39
Ⅱ	40
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	41
俳誌交歓	43
ひこばえ会通信(15)	44
他誌転載	46
巖の国父の蒼天(36)	48
天津・円満院門跡吟行記	50

今月の一句

いかなごのくぎ煮てふその釘曲り 桂樟蹊子

春の旬になるといつもいかなごの釘煮を送って下さる方がいる。鮎煮は赤褐色であるので、いかなごが錆釘のように曲り「くぎ煮」の名にふさわしい雰囲気仕上がっている。五十八年頃から特に明石から阪神にかけての人達の旬の食品の一つとして珍重されるようになり、それを知った師は早速旬にされたようである。

中七から下五の措辞は感動を深くする樟蹊子独特の表現であることを付したい。

隆子

手毬唄

塩路隆子

肥後よりも紀伊を教へて手毬唄
行けませぬ雪をんなより招き文
竹馬の子に聞かせ吾が武勇伝
鯛焼の袋のしめり抱きて帰路
羅漢千一塊となし今朝の雪
寒月光遮るものなき女身
裸木の遠目癖なり朱雀門

三月号光耀抄

初日の出山小屋に酌む薬缶酒
着膨れてもう風の子に追ひつけず
露天湯の燭に浮かびて雪の影
寒の雨吾に足らぬはコラーゲン
煩惱を焼き尽くしたき初不動
降りて来よ梢迷路を寒の月
天帝の覗き窓なり寒の月
大皿に置く寒椿和のアート
ころころと笑ふ少女や日脚伸び
芳しき七種粥や亡夫の膳
昇竜の背より俯瞰や夢始
源氏名に風花舞へり路地明り
紅さして仕上がるこけし雪の夜
定位置を占めて馴染みぬ初暦
猪肉を牡丹と咲かせ峡料理
サンタ服着ての疾走ビザバイク
温まる入浴剤の海の色

藤見佳楠子
鈴木照子
小澤菜美
竹内悦子
石川かおり
松岡和子
宮田香
辻香秀
中村ふく子
小林成子
山口キミコ
辻知代子
田下宮子
国包澄子
坂根宏子
佐用圭子
杉本綾

塩路 隆子選

白鳥の五千の声や日暮どき
 またたけば数の増えをり鳩
 湯たんぽに暖の原点想ひけり
 在りし日の夫のハモニカ冬銀河
 餌に集ふ野鳥にも序やお元日
 煮大根箸でくづして下戸の酒
 をさな児の集ふに似たり寒雀
 玄冬を割る鼻面や三冠馬
 寒の入り臍腑を持てる釈迦如来
 年新た晴れて雲なき桂浜
 清盛の偉業は今も寒の海
 逆光の唐松美しき冬落暉
 旅立ちやE席よりの雪の富士
 買ひ物に行かねば今朝の寒さにも
 煩惱解く七十噸の除夜の鐘
 喩ふれば幼の無垢や雪五尺
 枕辺に元朝の衣を揃へ置く
 黒豆の自慢の照りや祝箸
 焼酎を割れる寒九の水清し
 仕舞屋のいまも律儀な根曳松

栗倉 昌子
 五十嵐 勉
 大島 みよし
 大松 一枝
 落合 晃
 伊東 和子
 和田 郁子
 吉田 希望
 山崎 里美
 増田 一代
 松田 和子
 三川 美代子
 中川 すみ子
 能勢 栄子
 高谷 栄一
 森下 康子
 阪本 哲弘
 笠井 清佑
 塩路 五郎
 宮崎 左智子

笹鳴や畑に人無き昼下り
 寒の入糊の大刷毛反りかへり
 大皿の意匠大胆寒日和
 新品の宿の番傘打つしぐれ
 北風逃れ声取り戻す車内かな
 靈感を得てまた歩く冬の蜂
 柏手に山の気凛と初日かな
 木枯に磨かれし空七つ星
 近江まで神を迎へに初詣
 切れ長の仏の聞ける虎落笛
 賀状終へ雑事八分の達成度
 七草粥炊きて賑はふをんな会
 青竹の切っ先光る初手水
 網棚にコートさまさま新幹線
 元朝の鶏声ひびく過疎の村
 「これやこの」子の手が下に歌留多かな
 百人に守られてをり年賀状
 初はしご復興願ふ心意気
 鳥の来て煌めく川面初景色
 日脚伸ぶ猫は静かにストレッチ

伊藤 純子
 福本 スミ子
 坂上 香菜
 北尾 章郎
 中本 吉信
 常田 創
 前川 ユキ子
 笹井 康夫
 飯田 美千子
 池田 加寿子
 井口 淳子
 伊藤 和子
 伊藤 憲子
 伊庭 玲子
 岡 佳代子
 山田 愛子
 山本 節子
 山崎 真義
 山本 孝夫
 吉田 宏之

柚子の香や湯気の向こうは健康美
 雪吊やにはか庭師の寺男
 顔見世や一張羅着し人を呑み
 木枯に鍾馗の守る京町家
 浴槽に柚子姫浮かべ長湯かな
 着飾りて花街往き来事始
 元旦や鴨の親子の朝陽浴び
 風神の大き風袋堂寒し
 初雪に山近づける思ひかな
 海蝕崖潮噴きあぐる冬の海
 野良猫と心通はす小春かな
 冬至の日南瓜スイツ頂戴す
 掛けられて三日のしなり干大根
 菊枯るる仄かな香り残しつつ
 ひととせの達成感や柚子の風呂
 凍星の流れて昭和遠くせる
 汗ばみし冬の異国や旅の夜
 あれこれと帳尻合はせ十二月
 鱸酒は妙薬なりし蘇へる

秦 和子
 藤本 秀機
 中井登喜子
 長濱 順子
 難波 篤直
 西垣 順子
 西村 敏子
 田中 浅子
 寺田 光香
 土井くみ子
 清水侑久子
 鷺見たえ子
 片岡久美子
 桂 敦子
 川崎 利子
 紀川 和子
 木戸 宏子
 小西 和子
 小林 久子

琥珀集

光る石

鈴木 照子

光る石拾ひ少年春を待つ

着膨れてもう風の子に追ひつけず

古歌一首描きし車輜春着客

十二章のみすゞの詩あり初暦

イルカ風の寒雲染まる落暉まへ

新年のパワー黄金光堂

天国の母へ「祈り」の初滑り（浅田真央）

薬缶酒

藤見佳楠子

松過ぎや日溜りに干す禰宜の杓

屠蘇注ぐ辰の一文字浮き上がり

七種の昔に変はるハーブ粥

初日の出山小屋に酌む薬缶酒

深雪晴飛行機雲の籠めきて

餅掲きの杵音絶えて器械音

寒月や笛のもれ来る連子窓

雪の影

小澤 菜美

カムチャツカよりの大鷲志無く

大鷲の棲処は大樹湖を見て

母の知らぬ齢を生きて去年今年

蘆の間を鳥のさ走り初日の出

淡雪の如き湯豆腐嵯峨に泊つ

露天湯の燭に浮かびて雪の影

夜番の柝辻曲るらし音曲る

寒の雨

竹内 悦子

寒の雨吾に足らぬはコラーゲン
嫁が君ひとりの夜の侘しかり
外科医者に足を診せつつ御慶かな
読始め賢治童話を飽きもせず
地震一に誰も気づかず歌留多かな
みづうみや藍より深き初御空
味気なきパソコン御慶現代っ子

なはとび

石川かおり

飴細工の龍の尾光り初詣
息潜め縄跳びの輪に跳び込みぬ
一面に青の世界や湖凍る
煙の香髪にのこせりとんど焼
煩惱を焼き尽くしたき初不動
車窓より早咲きの梅探しをり
本殿の龍の眼光淑気満ち

雪うさぎ

松岡 和子

枯野行く気魄漲る一輛車
雪兎五人の孫へひとつずつ
よく動く嬰の拳や冬日向
降りて来よ梢迷路を寒の月
ふうはりと水干揺るる初蹴鞠
他愛なきはなし盛り上げとんど焼
産土の回廊つらら格子かな

冬景色

宮田 香

煙突の告げる風向き冬景色
天帝の覗き窓なり寒の月
節約に向かぬ性なり寒干両
白菜を一刀両断匠の刃
イタリアの旅の香りの酢葉
猛犬のリボンを攫ふ北の風
聖樹置き座敷の影を華やかに

初夢

辻 香秀

初日

小林 成子

初夢や追ひまはさるる五七五
夫逝きてたったひとりの初詣
大皿におく寒椿和のアート
初雪に遊女の舞の乱れかな
目が点にまぐる一尾が家一軒
花嫁のヴェールのごとし初冠雪
すき焼にひとりボジョレービター味

大絵馬

中村ふく子

喰 積

山口キミコ

初鏡髪型すこし変へてみる
女正月前頭葉を全開し
初富士や箱根駅伝繋ぐ樫
大絵馬の龍の眼力年新た
ころころと笑ふ少女や日脚伸び
湯気多きことの幸せなづな粥
人日やきれいに残す鯛の骨

芳しき七種粥や亡夫の膳
屠蘇祝ふ亡夫在すかに膳かこみ
真珠棚に初日いま射す志摩の旅
初日いま志摩洋上に拝しけり
初旅や赤福舗みせの抹茶席
初日受け船長威儀を正しけり
太鼓橋破魔矢翳して渡りけり
ふたりゐに通販おせち手抜きかな
健康の他は望まずお元日
喰積の伊万里の陶器妣譲り
世界遺産の宇治上社淑気満ち
庭掃きて隣家と交はず御慶かな
昇竜の背より俯瞰や夢始
東北に手かげんせよやうつた姫

声冴ゆる

マネキンの肩にしだるる餅手毬
源氏名に風花舞へる路地明り
はんなりと小さきお飾り細格子
子の世代年酒代りの白ワイン
乾杯にまづ箸おろす据り鯛
語らひつ夫に供へる小豆粥
語部のこきりこ節や声冴ゆる

龍の凧

半襟は夢二好みや冬薔薇
紅さして仕上がるこけし雪の夜
女正月得意料理を持ち寄りて
筆始墨たっぷりと卒寿の書
天空を自在に翔る龍の凧
愛犬をアップの写真賀状来る
風哭くは雪女かも夜終よむすがら

辻 知代子

田下 宮子

水琴窟

枯木山落暉とどまる術も無く
早梅や水琴窟の水ころげ
流鏑馬の一矢の気合おん祭
古き物並べ商ふ初大師
薄氷に解き放たれて水動く
定位置を占めて馴染みぬ初曆
大どんど背後の闇に押されけり

焼みかん

冬川に沿ひて上流峽の宿 (雲ヶ畑にて五句)
猪肉を牡丹と咲かせ峽料理
外つ国の人の興味や牡丹鍋
主の言ふ猟期は猪の動かざる
台湾の人に教はる焼みかん
街道の古き町並実南天
初雪が帷となりて山隠す

国包 澄子

坂根 宏子

瑠璃集

千礎

阪本 哲弘

峻嶮に代参頼む初詣
編集を終へて初刷手にしたる
奮発す妻と二人の年忘
初鏡後ろを過ぐる割烹着
枕辺に元朝の衣を揃へ置く

梅の宮

高谷 栄一

煩惱解く七十噸の除夜の鐘
予期をせぬ人より賀状早々に
天龍の大絵馬掲げ梅の宮
初雪をまとひて清し愛宕山
ラグビーの観戦体を傾けて

祝箸

笠井 清佑

老いてなほ結ぶ小枝の初みくじ
奈良太郎撞きて去年をば閉ぢにけり
黒豆の自慢の照りや祝箸
若冲の鶏冠の朱や初明り
この歳になりて根深の味を知る

貌

森下 康子

初夢の善悪貌に喰はれけり
三日過ぎほつとひと息「アベマリア」
冬枯の公園音もなく暮るる
夜明けより除雪車の音銀世界
喩ふれば幼の無垢や雪五尺

寒仕込

宮崎左智子

数へ日やまた口に出るどつこいしよ
仕舞屋のいまも律儀な根曳松
二日礼者愛ふばかりの嬰見せに
七つの子山に残して寒鴉
杜氏らの威勢よき唄寒仕込

三月号月評

初日の出山小屋に酌む薬缶酒

塩路 隆子
藤見佳楠子

初日の出を高山から見る旅に参加された時の句である。筆者には経験がないが、下界を離れた山小屋からの初日は千金の神々しさと、自然のその美に圧倒されたことであろう。しかも日の出を拝しながら、山男たちと酌み交わされたと言う「薬缶酒」の臨場感あふれる野趣をうまく配された。新年初句会の最高点を得られた句である。作者の本来の美意識の高さに加え、新しく身に付けられた野趣の中に見出された美をさりげなく句にされた感性を讃えたい。

着膨れてもう風の子に追いつけず

鈴木 照子

お孫さんがあるとは思えない若々しいおばあちゃんである。近くに生まれ、毎日お世話をされているので観察の行き届いた良い句を作られる。そこには何時も子供をみ守る暖かい目、しかも子供と同じ目線で成長される日々を俳句で記録されている。子供は風の子。身軽に駆ける子に比べ、着膨れのせいにながらも、もう追いつけなくなつた成長した子供を見ての喜びを感じているさ

まが句に溢れている。良い句である。

露天湯の燭に浮びて雪の影

小澤 菜美

露天湯に雪というのは情緒はあるが、めつたに巡り合えるものではない。一度奥飛騨で経験したことがあるが、急な雪で、温泉場へ到着するまでが大変、途中でスノータイヤを履くのにドライバーが四苦八苦した記憶のなかの雪の露天風呂であった。観察の行き届いた句である。闇のなかでは雪の姿が見えない。ただの明りを「燭」と表現したのも情緒を深くしている。そこだけに浮かぶ降りしきる「雪の影」がポイント、この句に惹かれる所以であろう。湯に浸りながら明りを見て、こんなにも降っているのかとの驚きが言わずもがな句に現れている。感動した。

寒の雨吾に足らぬはコラーゲン

竹内 悦子

作者は最近腰や足を病んでおられる。春になると少しは楽になられると思いつながら、ついあれこれと編集長の雑用に変らぬ協力を願っている。コラーゲンが句材になつたのをみるのは初めてであるが、掲句は今の作者の偽らぬ呟きであろう。新しい句材がしっかりと句に馴染んでいる。急がなくていいから元の元気な足腰に戻っていただきたいものである。快癒を念じるばかりである。